

# 国語史学断章

——万葉集の編纂——

塚原鉄雄

はしがき——古代デイスポティズムの形成——国史修撰の意義——實用主義的歴史観の確立——古語の甦生——天武天皇——  
——万葉集は何故編纂せられねばなかつたか——数多くのアンソロジー——人麻呂集の取材範囲——創作の場における  
蒐集——人麻呂と人麻呂集——古語認識の享受的段階より実践的段階へ——そのウェイト——結語——註——附記

国語史学史の概念規定、及び、その構想に関して、稿者は、一九五三年二月十四日に、京都大学文学部の国語学国文学研究室における会合で、「素描国語史学史」の名の下に、批判を乞うたことがある。若干の補訂を加へて、雑誌日本文学史研究に登載の予定であるから、ここに繰り返さない。

過去の国語史認識を検討し、稿者は、自己の国語史を体系化しなければならぬ。日本文学史研究の十六号と十七号とに掲載せられた拙稿、「国語史の時代区分——話手と聞手との関係から国語の史的展開を三区分してみよう——」は、いはば国語史の立場を明示したわけであり、「国語史の時代区分追考」は、そのやうな立場からする言語の変遷といふことの意味を考察したのである。本稿は、これらと關聯して、執筆する。卑見によれば、言語を対象とする研究は、言語体



系の樹立を企図する言語の立場と、言語史の立場とに分れる。然して、所謂史的言語学は、決して「歴史」の立場に拠るものではなくて、言語の立場に属するのであり、言語史とは、言語の社会的機能史となるのではあるまいか。かくて、国語史といふものが、世界言語史の一環を形成し得ると思ふ。今日、世界史的視野において把握せられるのでなければ、「史」と称するに値しない。無論、それは、日本といふ個の解消を意味せぬ。個別性の追求は、全体的聯関においてでなければ、究極において、成立し得ぬことからすれば、当然のことを指摘したに止る。

太安万呂の上奏文が、真に事実を伝へるものとすれば、天武帝は、その施策の齎す歴史的意義を、十分に自覚してゐたといへる。諸氏の個別的に継承して来た数々の伝誦を、真偽のレッテルを附することと選別し、一つの標準を作成して、日本の歴史を、天皇中心の古代神権国家建設のために、指導理念の根柢としたのである。修史の業は完成に至らなかつたとしても、その実質は既に実践せられた。例へば、八姓の決定である。各民族の特権と、その由来を物語る祖先の英雄的事蹟の伝承とは、新しい国家的観点から、再評価せられ、秩序づけられる。恐らくそれは、古語拾遺といふ著書を残したのは一人に過ぎなかつたけれども、幾多の齋部広成を生んだに違ひない。歴史編纂の事業が、推古朝の昔から朝廷の手によつて、企画せられながらも、久しく完成しなかつたのは、新しい要求と旧い勢力との頷頰が、さうさせたまものといへないであらうか。蘇我氏と共に焼亡した聖徳太子修撰の国史を、今日、詳かにし得る筈もないが、天皇記、国記、臣連伴造国造百八十部、并せて公民等の本記を録したといふことから推察せられる体裁を、天皇国家の完成した後に編纂せられた記紀が、皇室の歴史を敘述するのを主軸として、それ以外の伝承は、単に挿話としての位置のみをし、か与へないのに比するならば、この間の事情は、概ね推測できさうである。蘇我氏と提携しなければならなかつたといへ、天皇政治の障碍であつた守旧勢力の元兇とも称すべき物部氏を誅滅し、新しい秩序の確立に邁進した聖徳太子に、修史の志があつたことは、歴史といふものが、どのやうに認識せられてゐたかを、雄弁に物語るといへよう。仏教の採



否を廻る二つの勢力の対立は、根源的に考へるならば、いはば、氏族制と天皇制と、新旧両秩序の抗争であつた。そして、物部守屋の敗死は、歴史が、新しい体制に左袒したことを意味する。かくて、天皇中心の集権国家の経綸は、壬申の乱の終結に至つて、一応、達成せられる。これに次ぐのが、天皇家の内部肅清朝といふわけだが、いまは触れない。

とにかく、飛鳥浄御原の朝廷は、さうした始原時代に終末を宣言した。無論、かかる営みは、一朝にして完成すべきものではない。天武天皇自身、歴史学者の指摘する如く、多分に古代英雄の面影を保持してゐたし、<sup>(一)</sup>官撰の日本紀に少くない異伝を併載せねばならなかつたこと、或いは、万葉集や風土記を通じて推測せられる非標準的伝承の存在は、<sup>(二)</sup>實質上、それらを埋没し得るものでなかつたことを証明する。天武帝の統一とて、一まづ形式を完備するに止まつたのかも知れない。しかし、それが、形式的であればあるだけ、却つて、内容の充實を期する要があらう。景仰せられる英雄として軍を興した大海人皇子は、漸次、古代デイスポティズムの中心たる天皇としての地歩を固めて行くわけだが、新しい秩序といふものが、単なる現在の實力の均衡に基づくのでなく、歴史的根拠に由来することを証明し得るとすれば、その絶対性を獲得することができる。

家々に継承せられて来た伝誦は、彼等が、必ずしも、悠久の始源から天皇家の隸属者であつたわけでもなく、程度の差はあつたとしても、霸権獲得を庶幾する競争を、相互に闘つて来た間柄であつたから、天皇の絶対性を基礎づけるためには、寧ろ厄介な要素を含んでゐたに違ひない。それらは、天皇家の絶対性を、支持し得るものではなかつたであらう。

天皇による絶対支配制の完成のために、あらゆるものが利用せられる。すべてのものは、天皇の絶対権を確立させるための手段と化し、この目的に副ひ得ないものは、抹殺せられねばならぬ——これが、聖徳太子に始まる天皇国家形成のための根本方針であつた。臣従を肯んじない豪族は、かくて、次々と覆滅せられて行く。豪族自身も、その所有する人民も土地も、天地創造の根源から、本質的に、隸属物として形成せられたとする体制下に、再編成せられる。この体



制に、順応するための世界観が樹立せられ、その基礎づけに、新しい歴史が編まれる。豪族達の枠内で、夫々個別的に、その事蹟を伝承せられて来た英雄達は、それを把持する各民族と皇室との現在の関係において、把握せられ、再構成せられる。さうして、この新事態に矛盾する説話は、少くとも正史の中に、その席を与へられなかつたのではないか。記紀の伝へる痕跡によつて、大和朝廷に対する強力なライバルであつたと推察せられる出雲——その風土記が、他の地方のものと比較して、伝説的色彩の著しく稀薄なことは、誰しも注意しよう。勘造者の個性を、考慮しなければならぬとしても、それが、本来、単なる一卷の著作でなく、朝廷に報告する、公文書以外の何物でもなかつたこと<sup>(三)</sup>からすれば、律令制度の浸透が、当時、形式の上では、一応、完結してゐたこと<sup>(四)</sup>に鑑みると、この地方の主体性は、漸次、喪失しつつあつた証左と、見做さねばなるまい。しかも、出雲伝説の独自性が、天地の開闢といふ、極めて重大な事項に関しても、なほ保たれてゐる事實は、現存の出雲風土記が、いはれるやうに、中央に進められないで「恐らくは、国底若しくは国造家へ残された草稿本であらう」<sup>(五)</sup>といふことが、少しは関与するのではなからうか。——とまれ、それは天平も五年のことである。

物部氏の誅滅に、皇室を凌ぐ実力者、蘇我氏の援助を期待せねばならなかつた聖徳太子の修史が、天皇と各民族とを、それでも、個別性において編纂しようとする不徹底を、まだ、十分には免れなかつたのに対し、さうした既成勢力への妥協を、一まづ排除し得る体制を具備して、真に新しい秩序の発足を遂げようとする天武天皇ともなれば、これに相應しい理念を賦与する歴史の樹立を要求する。聖徳太子の革新政治が、蘇我氏といふ一大勢力と提携すること<sup>(一)</sup>にのみよつて、遂行せられたに對し、大海人皇子の覇業は、彼を廻る複数の人々の輔翼を得るといふことになる。さうして、蘇我氏といふものが、天皇専制の抜き難い障碍として、永く皇室の禍根をなすやうになつたのに比して、壬申の乱の功勞者達は、中大兄における鎌足といつたものすら存在せず、神格化せられた天皇の専制政治が実現する。日本書紀が、六七七年以降、貴族達の反抗を記述しないことは、それらが絶無となつたことを、必ずしも意味しないであらうが、少くと



も、反天皇的蠢動が、天皇政治の迫るコースに、殆んど影響しないまでに至つたとはいへよう。朝廷を舞台とする葛藤が、天皇家の人々を、その渦中に巻き込むことはあつても、天皇制そのものの根柢を、微動だにさせるものではなかつた。飛鳥浄御原宮で即位した天武帝の施政が、宗教上の制度や施設の充実を相伴したことは、川崎庸之氏も指摘せられるところであるが、注目すべきであらう。卑見によれば、ここに、政治的統率者としての天皇は、信仰的中軸ともなり得る。超現実的存在たる神仏と結合することによつて、現人神としての地位を獲得し、あらゆる意味における絶対的支配者となるのである。これは、天武帝個人が、固有の神々に対する不信を、記録されることとは、本質上、全く別の意味をもつ。天皇の占める歴史社会的地位といふ観点で、吟味すべき事柄といはねばならぬ。

このやうな時代の要請として企画せられたのが、「邦家之経緯、王化之鴻基」としての歴史である。そこで、人間は、古伝承を、単に継承し受容するのではなくて、寧ろ、積極的に、これを構成する。過去は、現在から切り離された遠い昔ではなくて、現在に生きる。現在に奉仕し、現在を基礎づけるための過去である。過去は、事実として、換言すれば、歴史の変遷の結果として、現在に働きかけるのではないので、現在によつて把握せられ、編成せられるのである。それは、現在に対立する概念ではなく、現在の次元で把握せられ、現在を規定する根源的な理念である。従つて、未来も、また、現在の發展的帰結として予想せられるのではない。過去、現在を結びつけるものが、同質的な一元性であつたのと同じく、現在と未来とを区別するものは、単なる物理的時間の推移であるに止まる。所謂天壤無窮の神勅は、かかる歴史観を、端的に表明するものとして、事実性の有無はともかく、看過し得ない一徴標といへよう。即ち、歴史は、現在を保持し、現在の連続——発展ではなく——としての未来を維持するための、いはば実用的な手段であつた。

記紀の内容は、単なる六世紀の日本社会の反映といつたものではない。古い伝承の忠実な記録と異なることは、十分に銘記しなければなるまいが、それは、あくまで、編纂物としての記紀の形象といふ次元に即してのみいひ得ることであつて、その資料を伝承に仰ぎ、いはば加工せられない原初の痕跡を、悉くは喪失してゐないといふ見解と、矛盾すると



は限らないのである。この意味で、畏友益田勝美君が、「伝承と称ばれるものは、その外面性においては不変であつても、その内面性においては必ずしも不変ではない」といふ、樺正俊氏の言葉を引きながら、風土記を援用して、記紀歌謡の中に、前代の文学を把握しようとしたことは、逆に、記紀の本質を検討する上でも、極めて有意義と考へられる。記紀から始源時代を想定し、これによつて再び記紀を検討することは、論理の形式上、誤りに庶幾いといへさうだが、かかる循環は、決して平面上に繰り返すのではなく、いはば螺旋的發展を遂行し得るならば、それ以前に暗黒の資料しかもたぬ古代を対象とする場合、殆んど唯一の方法ではあるまいか。このやうな無限の営みを通じて、歩一歩眞実に近づき得るのであり、そのためには、あらゆる仮説を追究する柔軟な頭脳を要するであらう。我々は、文献学的方法の到達点から出発せねばならぬ。六世紀または八世紀の日本社会が、造物主の一声で、無の中に、倏忽として出現したものでないとすれば、今日の歴史科学が野心的な試みをなしてゐる如く、文献の壁を破つて、歴史を溯源する要がある。具体的な事実だけが歴史なのではない。また、原因があつて結果があるのではなくて、結果あつての原因である。<sup>(九)</sup>従つて、原因を究明することは、同時にその結果を掘り下げることになる。歴史的立場から記紀を把握しようとするのは、これを、一つの結果として認識することに外ならない。

記紀の歌謡が、一字一音の仮名で表記する方針を持することは、伝誦を、事柄としてだけでなく、言葉としても伝へようとしたからではないか。天武帝は、帝皇の日継と先代の旧辞とを、誦習させたといふ。更にまた、「上古の時、言意並びに朴にして、文を敷き句を構ふること、字に於て即ち難し」といふところからすれば、それらが、古語で表現せられてをり、言語を離れては、伝へるべき事柄もないとする思想を認めるのである、即ち、それは、言と事との一致を信ずる、一種の言霊信仰に通ずるといへようが、記紀の歌謡が、その中で定着せしめられた時代の作であるか否かは問はず、編纂の企画せられた時からすれば、相当に古いものであつたと想像できる。日本書紀の訓註は、後世の補入であるかも知れないとしても、古事記の場合、明かに撰者の筆であつた。<sup>(二〇)</sup>



過去を敘述するに、過去の言葉を以てする。無論、過去の言語といつても、前代のそれであり、現在のそれと、連続的な聯繫を保つのであつて、現象的にいへば、日常性を喪つた語彙の挿入、といった程度のものであつたと思はれるが、それはともかく、過去、現在、未來を統一する原理として提示せられる歴史、——換言すれば、永遠の現在といふ次元で把握せられた歴史が、古語で記述せられることは、同時に、古語が、現在において認識せられたことを意味する。記紀の歌謡は遠い時代のノスタルジャーとしてではなく、現在に生きる人間の共感をもつて、享受せられたに違ひない。ここに、古語は、新しい脚光を浴びて、舞台に復活する。古語と現代語とを隔てた牆は撤去せられて、すべては、現在において活動する。或る言葉が用ゐられるかどうかは、それが古語であるか否かに因るのではなくて、対象を満足に表現する上で、適當か否かにある。

現在的次元で把握せられる古語が、單なる享受の段階を脱して、表現の世界にまで及ぶ、——我々は眼を転じて、伝承から、創作の場に向けなければならない。

数少い編纂者が、皇室族の歴史を、日本の歴史にするばかりでなく、それ以前に、皇室族が、総がかりで、日本の歴史に仕上げて行くところに、ディスポティズムの本質がありましよう。——益田勝美君の言葉である。<sup>(二二)</sup>かかる英雄時代に含まれた専制を、十分な目的意識の下に、古代官僚国家のそれとして確立しようとしたのが、天武帝であつた。

意識は、行動の阻止において、生活の妨碍において發生するといはれる。<sup>(二三)</sup>天武帝は、英雄としての反面を失はないながらも、理念上、聖徳太子の志向した、神格化せられた絶対的専制君主としての天皇を、実践において樹立した。ここに、英雄時代に潜在して遂行せられたディスポティズムは、明確に、時代を規定するものとして、歴史の表舞台に、登場する。厩屋戸皇子や中大兄が、久しく皇太子として、ディスポティズムの根柢を培つたのに比して、大海人皇子は、自ら登極して、これを確立しようとしたことは、かかる推移を、寧ろ象徴するといへよう。しかしながら、嘗て、ディスポティズム推進の動力であつた中大兄が、天智天皇となつて、政治の表面に立つと、も早、それまでの神通力を、従



来のままで維持できなかつた如く、時代的展開を考慮するとしても、やはり、困難であつたに違ひない。例へば、古代天皇国家に相応しい新都の建設が、企画せられながらも、竟に実現しなかつたではないか。旱魃、飢饉、更にかうした事情に基づく或る種の抵抗も、想像できさうである。だが、単に天変地異といった超絶的事由に止まらず、「新都の造営はともあれ、現実にはなお浄御原宮そのもののまもりを固めなければならぬ事情が存在した」<sup>(二三)</sup>と考へるべきであらう。この緊張に直面して、天武帝は、その行動の意義を、明白に自覚し、これを宣揚する要を認めたのである。かくて、王化之鴻基であり邦家之経緯たる国史が、発案せられる。それは、天武天皇といふ固有名詞で呼ばれる人物の要求といふよりは、時代の要請であり、この歴史的座標を占めるのが、具体的には、天武帝であつたと考へるべきであらう。単なる個人的な企画に止まらず、時代的背景に立つ要望であつたが故に、我々は、奈良朝の記紀を有ち得るのである。かかる天武天皇の雄図は、その在位中から「毎に侍執の際において、趣ち言政事に及ぶ、毗補する所多」かつた皇后が、自ら帝位に即いて、旧い因縁の絡む飛鳥を去り、新しい規模の下に、藤原京を経営するまで、十分な実現を期することができなかつたけれども、その端緒は、既に開かれたのである。新しい秩序の確立する過程の推移は、歴史学者の研究に俟つとして、いまは触れる要もない。このやうな過去観が、言語認識の上に、どのやうな形で反映し、展開してゐるかを、ここに検討しようとするのである。

万葉集を対象とするとき、二つの次元から、これを把握することができ。一つは、作品の夫々詠作せられた次元においてであり、一は、万葉集といふ編纂物としてのそれである。作の次元、集の次元と呼んでもよからう。明治以降の万葉研究は、余りにも、前者の立場に抱泥し過ぎてゐたのではあるまいか。和歌の歴史的展望といふことでは、相当に成果を挙げ得たけれども、何故、万葉集といふものが、あのやうな複雑性を胎みつつも、編纂せられねばならなかつたかといふ点に関しては、内面的に、さう深くは追求することがなかつたやうに思はれる。しかしながら、これを看過もしくは軽視するならば、万葉集は、資料を保存するための、単なる偶然的結果でしかない。もしさうだとすれば、万葉



集は、正確な資料に基づく限り、何時編纂せられてもよかつたといへる。それでは、万葉集の成立を考究することの、歴史的意義も見出し難い。だが、万葉集は、果して和歌の蒐集に興味を抱く人の、偶然的所産であるに止まるであらうか。

我々は、万葉集の記載を介して、当時、少なからぬアンソロジーの、既に存在したことを知つてゐる。それらの分類とか整理とかは、別の学者に任ねるとして、<sup>(六)</sup>国語史学的観点から、考察を試みたい。

万葉集の卷一と二において、藤原宮御宇天皇代の項に、文武天皇にまで及ばないのは、既に指摘する学者もあるが、持統天皇の代までで終る古い資料のあつたことを想像させる。<sup>(二四)</sup>更に古いさうした類いが、他にもあつたであらう。旧本、古本、古記、一本、一書、或本、或書など、名称は明かといへぬけれど、さうしたものの存在を思はせる記録はあるし、書式の上から見ても、数種の資料のあつたことが、推察せられる。それらが、どのやうな内容で、何時頃に成立したのか、今日となつては、明かにする術もない。ただ、万葉集の卷一に見える旧本が、僅か二例しかないので、はつきりしたことは断言できないけれども、近江朝以降の作品には照合しないところから、その前後以降に及ばない歌集であつたことを、消極的ながらも、想像させてくれるのは、時代的特質に鑑みて、注目し値する。それが、当代の歌のみを集めたのであるか、それとも、年代的に異なる作品をも含めるのであつたか、——甚だ興味を惹くこの疑問を、解明する手懸に欠けてゐる。が、しかし、持統朝に至ると、柿本人麻呂と呼ぶ作家に、歌集のあつたことを、我々は知つてゐる。所謂人麻呂集は、種々の問題を胎んでゐるが、その究明は、万葉学者に譲るとして、稿者の特に指摘したいのは、次の諸項である。

第一に、取材の範囲が、拡がりをもつてゐることである。略々同時代の作家と思しい、春日王、間人宿禰、元仁、絹、島足、麻呂の諸作の外、万葉集自体の註記によれば、東歌の如き方言の作も収録してあつたらしい。<sup>(二五)</sup>字句の必ずしも相等しくないところから、伝承の経路に多少の異同はあつたと考へられるが、いまは、問ふを要せぬ。更にまた、記録せ



られた明証を、指摘し得るわけではないけれども、尠なからぬ古歌をも、併せ採録してゐたであらう。人麻呂集に出てる歌の本文に、異同のあるものを含む事實は、それらが、特定の個人を作者とする創作ではなしに、伝承の過程を経たことを想像させる。ここには、人麻呂歌集に見出し得るといはれる卷十二の寄物陳思から、二、三を例示するに止る。

八釣河 水底不絶 行水 続恋 是氏歳 或本歌曰 水尾母不絶

磋上 生小松 名惜 人不知 恋渡鴨 或本歌曰 巖上爾 立小松 名惜 人爾者不云 恋渡鴨

浅葉野 立神古 菅根 惻隠誰故 吾不恋 或本曰 誰葉野爾 立志奈比垂

かかる註記は、人麻呂集所載の時から、既に存在したとも考へられるが、また、万葉集に採録するに方つて、或いは、後人の補筆として、附加したとも見做し得よう。しかし、何れにしても、これらの歌が、伝承歌としての性格を有することは、否定できないと思はれる。そして人麻呂集に定着せられたものが、そのまま、伝承歌の群に投じたとは、一寸、推定し難いのではないか。もし、さうであれば、編纂物としての人麻呂集といふものが、或る程度、普及してゐなければならず、普及してをれば、「或本」に、異文を留めることも、まづ、ないといへよう。やはり、伝承として、口誦の世界に継承せられて来たものが、異文を生じて、人麻呂集なり或本なりに、夫々の形を残すことになつたと解さなければならぬ。新羅に遣はされる使人が、人麻呂の作を誦詠して、字句の異同を指摘せられることとなつた、万葉集卷十五の場合とは、本質的に、その類を等しくしないのである。人麻呂集における人麻呂は、仮に自身の作を採録したとしても、いはば享受者であり、定著者であるが、この場合は、さうでない。

前者の人麻呂は、ここに至つて、使人達となる。人麻呂の詠が、文字言語として保存するに止まらず、口誦の場に、伝承せられて行つた証とはなし得るけれども、いまは無関係である。

このやうな見解が、もし、甚しく当を失うるのでなければ、人麻呂集には、長歌、短歌、旋頭歌の、様々な歌体を収容する事実をも籠めて、時間的にも、空間的にも、頗る広い視野に立つて、蒐集しようとする意図があつたわけである。



これは、記紀が、今日、風土記を通じてのみ知り得る如き、非天皇家関係の歌謡には、極めて狭量であつたのに、対照的といへよう。

第二に、実作者の編纂になるといふこと——。人麻呂の編輯したといふ確証は、勿論、存在しないわけであるが、敢へてその名を名として呼ばれてゐることと、明らかに別人の作をも収録することとからしても、誰かが人麻呂の作品集として編したものでないことは、疑念を挟む余地がない。ただ、その歌集に人麻呂の作品の、比較的多数に存するところから、何人かが、妄りにこの名称を附したことも、後世の杜撰な、例へば、人麻呂集、赤人集、家持集などの類に徴して、或いは、考へ得るかも知れない。殊に、武田祐吉博士の綿密な用字字数の調査は、この仮説を、支持する論拠の一つともなるであらう。<sup>(二六)</sup>だが、例へば、「タナビク」に対して、「霏霏」の漢字を宛てる例が、周知のやうに、人麻呂の作と人麻呂集の歌とだけに限るといつたふうな、個性的ともいふに足る、特殊な用字の共通性などを考慮すれば、積極的に、両者を分離すべき論拠は、見当らないやうに思ふ。そこで、稿者は、仮りに、臆断の域を出ないとしても、人麻呂集を以て、柿本朝臣人麻呂の手を経たものとしたい。即ち、古代の資料を対象とする場合、根拠を覆すべき、積極的な反証の発掘せられるまで——疑ふことによつて信憑性の度合を、科学的に追求することは、無論、欠くことができないけれども——一応、在来の見解乃至所伝の承認を前提としなければならぬのである。<sup>(二七)</sup>と、すれば、人麻呂の作歌と集歌との字数の差も、後者の幅が、前者よりも広いだけであつて、前者は、その中に含まれるのであり、相対立する相違を示すわけではないのだから、概括的、機械的方法に基づく、統計的数表のみによつては、両者の無関係を、殊更に断定し得ないであらう。

柿本人麻呂といふ歌人によつて、自作以外の蒐集が行はれたことは、歌の編纂——その体裁の如何はともあれ——が単なる鑑賞的目的としてでなく、創作的実践の場においてなされたことを、推測させるといへよう。いはば、手段としての歌集である。



序文によれば、古今の和歌を蒐集し、後世の景仰を期待する古今集は、歌人を撰者とし、後には、作歌の場で頻繁に利用せられたにも拘らず、鑑賞のための目的として編纂せられたといへよう。即ち、古今集を撰進する行動と、具体的に創作する行動とは、彼等にとつて、一応、分離した行動であり、前者は後者の集成といふ意味を有するに過ぎなかつた。——尤も、蛇足までに附言すれば、これは、古今和歌集の撰集に就いてのみいふのであつて、例へば紀貫之が、鑑賞的目的としてしか、古歌なり他人の作品なりを、把握しなかつたと説くのではない。

しかるに、人麻呂集は、人麻呂の創作行動に、密接してゐたと思はれる。このことは、独立したテーマとして、徹底的に調査しなければなるまいが、いまは、一例を挙げるに止めよう。

未通女等之 袖振山乃 水垣之 久時従 憶寸吾者 (四一五〇一、人麻呂)

処女等乎 袖振山 水垣 久時由 念来 吾等者 (十一—二四一五、人麻呂集)

嘗て稿者は、最初「憶寸」とあつたものが、伝誦の間に、「念来」と変じたのではないかと疑つた。<sup>(二九)</sup>しかし、人麻呂の作と集との關係を、前述のやうに考へるならば、寧ろ逆なので、民謡的なリリズムを払拭した人麻呂が、強烈な個人的感慨の発露として、前者の如き改作を敢へてした、といふべきであつた。今日の文学觀からすれば、模倣乃至剽竊とも断すべき手法であるが、創作の觀念を異にする当時、これは許された筈である。——といふふうな事實は、後世になれば、歴然とした確証を挙げ得るけれども、<sup>(三〇)</sup>この頃は、果して如何であつたか。稍々時代は降るけれども、大伴池主から家持に贈つた歌の中に、

一 古人云

都奇見礼婆 於奈自久爾奈里 夜麻許曾波 伎美我安多里乎 倣太豆多里家礼 (十八四〇—七三)

があり、契沖以来、人麻呂集の「月見 国同 山隔 愛妹 隔有鴨」(十一—二四二〇)の改作といふことになつてゐる。自己の心情を吐露するに、古歌の引用を以てすることがあり、その場合、当人の主体的意図から、字句の修正を施



すことは、許容せられたのである。とすれば、人麻呂が、一般的表現ともいふべき、伝承歌たる人麻呂集の作品によつて、切実な特殊的感慨を表出すること、及び、その目的から、如上の緊張を加味することは、十分に推測してよい。句と句とが相換ること、夫々の自立性を認めようとする例を、我々は、知つてゐる。<sup>(二二)</sup>そこまでは考へず、人麻呂自身、必ずしも創作意識を伴はなかつたとしても、これを享受する側からすれば、歌人の詠作として把握したかも知れない、ともいひ得よう。とにかく、人麻呂集の作が、人麻呂の表出形象に、参与するものであり、さうした創作の場に聯関する蒐集であつた。この意味で、伝誦歌が、記紀に採録せられるのと、行動の性格を、異にするといはねばならぬ。当人以外の作が、創作の次元において、能動的に把握せられようとしてゐることである。古い歌謡を、現代的次元で享受する記紀は、だから、段階的に、前代に属する。

いま、国語史学的見地から、かかる特質を有する人麻呂集と、歌人柿本人麻呂との聯関を考察してみよう。即ち、人麻呂において、過去の言語は、決して、彼自体から隔離した世界に孤立するものではなくて、現在に躍動する生命力に満ちてゐた。それは、単なる過去の遺物ではなくして、同時に現在の言葉である。さうした息吹きを、この作家は、古語に導入した。彼が、例へば、枕詞の中に、その獨創性を樹立し得た事實は、<sup>(二三)</sup>かかる人麻呂の史的座標を見極めることによつて、その意義を、把握し得るのではなからうか。

人麻呂の天才といふものが、単にそれだけとして捉へられるに過ぎないのであれば、人麻呂研究は、歴史を超越するただの鑑賞でしかなくなる。換言すれば、絶対において把握することであり、人麻呂は、数多くの和歌を、史的展開に盲ひて、弾正する準繩に外ならず、仮に、文学はあるとしても、もはや、そこには、文学史は存在しない。——そこで、オーソドックスな所謂国文学が成立する。しかし、我々は、人麻呂の活躍した持続朝が、過去に對して、如何なる意義を賦与したかを検討した。さうして、そのやうな時代に生きる作家として、宮廷歌人柿本人麻呂が古語の認識に及び、それが、実践を伴つた永遠的現在の次元に立つことを、考究した。



従つて、文学的形象の美学的評価からすれば、勿論、人麻呂独自の才能に帰すべきではあるが、行動そのものの性格を見れば、時代の子に外ならない。人麻呂を、文献に見る限りは、嚆矢とする実践的な古語認識は、公任の出現するに及んで、明確な自覚を伴ふ宣言となるのであるが、爾来、久しく国語史認識の主流をなすのである。類聚歌林における山上憶良をはじめ、高橋蟲麻呂歌集、笠金村歌集、田辺福麻呂歌集など、典拠を明記した歌集が、作家と関聯を有することは、看過し得ない事実である。これらの中、蟲麻呂集以下に就いては、論義の仔するところであるが、明かに、万葉集とは所伝の異なる古歌を、憶良は、採録してゐた。<sup>(二四)</sup>即ち、彼独自の拾集を、なしたのである。

かくて、我々は、当時、如何なる意義をもつかを了解することができた。人麻呂や憶良たちは、広い分野に、資材を探求し、それらを、自己の創作の肥料としたのである。かかる実践的立場を離れては、和歌の蒐集を考へられない。さうして、その決算ともいふべきものが、現存万葉集の成立である。だが、結論に至るまでに、稿者は、国語史学史の見地から、古語把握の実態を辿るべきであらう。

過去を過去として追懐するのではなく、「以古人之跡代今日之意」〔十八—四〇七八題詞〕のが可能であつた当時は「争発心々和古体」〔六一〇一一題詞〕といふ事実や、曩に引用した如く、古歌の誦詠や古人の詠作を以て、自己の心情に代弁させる。古歌の成立した場は無視せられて、新しい環境条件の下に把握せられるこの手法は、恐らく、大陸の断章取義と無関係ではあるまい。例へば

賦詩断章。余取所求焉。惡識宗乎。——左伝 襄公二十年。

古詩之断章取意。唯須得情。——遊仙窟。<sup>(二五)</sup>

といふそれである。しかしながら、かうした方法の適用にしても、古語に対する現在の認識を前提としなければ、成立しない。逆に、かかる手法を導入することは、かかる古語認識の成立を意味する、ともいへよう。両者は、相表裏して、不離の關係をなす。従つて、如上の過去観——それも溯源すれば漢土に至るのであらうが——の樹立を見た以上、この



やうな展開を遂げるのは、当然であつたとも考へてよい。

縷縷たる敘述で、明かと思ふが、彼等は、過去に没入して、過去に生きることとした——例へば徒然草の著者のやうに——のではない。過去をば、現在に引き摺り込んで、現在の照明下に、新しい生を賦与したものである。従つて、それは、あくまで、現在の主体性を喪失するものではなく、寧ろ、貪婪な現在の食欲——旺盛な生命力を示すといへる。だから、具体的な例は、多くの学者の報告があるので、いまは、触れないけれども、古歌によつて詠作することは、方言を導入することと共に、一方で、新語および新風の語法を採用するのと、<sup>(二六)</sup>その根抵において、軌を一にする。絶対的現在における自己を中軸として、すべてが、展開する。卷十八の次の例は、かうした現在の古語が、敢へて古歌を改竄せしめたものである。

#### 古歌目

橘 寺之長屋爾 吾率宿之 童女波奈理波 髪上都良武可 (三八二二)

右歌椎野連長年説曰。夫寺之屋者不<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>俗人寝処<sub>一</sub>。亦<sub>二</sub>偁<sub>二</sub>若冠女<sub>一</sub>曰<sub>二</sub>放髮艸<sub>一</sub>矣。然則腹句已云<sub>二</sub>放髮艸<sub>一</sub>者尾句不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>重云<sub>一</sub>著冠之辞<sub>二</sub>哉<sub>一</sub>。決曰。

橘之 光有長屋爾 吾率宿之 宇奈為放爾 髪拳都良武香 (三八二三)

現存の万葉集が、精撰せられてゐないにしても、幾度かの編纂を経た結果であることは、誰しも、否認しない。さうして、敢へて最終の編者とはいはないけれども、大伴家持が、重要な位置を占めることは、一目して瞭かである。その作品を検討すれば、彼の創作が、万葉集の存在に負ふ所の大きいことを、十分に覺る。個々の具体例に関しては、類歌の比較を試みた、諸家の註釈に譲つても、差支へあるまい。いはば、家持は、かうした国語史認識の集成者として登場するわけである。長年の修正は、誤解に基づくのであるが、古歌の誤写誤読に因る万葉人の創作を、幾つか指摘し得る<sup>(二七)</sup>ことは、古語が、彼等にとつて何であつたかを証明する、よい例といへよう。



概言すれば、現在を確立するための実践的場において、現在以外のものが摂取せられる——かかる時代的趨勢を背景とした万葉集の、形式内容に互る複雑性である。だから、一見、未整理の雑駁を免れないやうではあるけれども、求心的な統一原理に支配されてのそれであつて、むしろ、万葉人の健啖な内臓の包容力を示すに外ならぬと、認識すべきである。

遠い英雄の事跡に終る伝承は、現在から切り離された昔の物語であつた。それが、新しい要請に副つて、歴史に轉換し、現在を規制する。かくて、これを伝へる言説は、過去から現在の世界に転入する。しかし、それは、必ずしも、現代語に移籍したことを意味しない。古語としての性格を保留しつつも、現在における活動を、現代語と並んで、許容せられるのである。だから、この段階では厳密にいつて、古語に対する時間的離隔の觀念がなかつたといへる。絶対の現在によつて過去を把握することからすれば、当然であるが、古語に対しても、方言に対しても、質の相違といふよりは、量的な誤差としてしか認識せられてゐない。すべては、実践的現在の言語といふ枠内での、相対的な多様性である。

現代語といひ、古代語といふのも、体系においてでなければならぬ。従つて、齊しく四段に活用する動詞「あそぶ」も、記紀歌謡の言語体系で把握するときには、古語であるし、今日の童謡の中に、現代語の体系を構成するものとして把へ得るならば、現代語と見做すべきであらう。しかるに、例へば、上二段に活用する「ふ(乾)」の如きは、現代語体系の埒外に出てしまふ。従つて仮りに、現代語による表現の中に介在するとしても、やはり、古語といふ外ないのである。この意味で、古語を、実践的な現在の次元に導入するに方つて、大別、二つの方法が考へられる。一は、国学者の擬古文のやうに、体系として摂取しようとするのであり、一は、現代作家の文章に、古い語法形式の残骸とか、耳なれぬ語彙とかを散見するといふやうに、断片的な導入に止まるものである。然して、前者は、擬古文がさうであつた如く、等しく永遠の現在ではあるにせよ、過去に、より重心が置かれるやうにならなければ、成立しない。かかる根本的な立場の問題に連なるものとして、万葉人のそれが、前段階を示す鑑賞的認識の側面にあつてはともかく、実践的認



識において個別的段階を出ないのは、容易に肯ひ得るであらう。

註

——一九五三・四・七——

〔一〕 川崎庸之『天武天皇』（岩波新書九八）。なほ、壬申の乱が、嘗て説かれたやうな、近江朝の急進に対する保守的な旧貴族の勝利といったものでないことは、この書物（一二二頁）にもいふ通りである。

〔二〕 松村武雄博士の万葉集における宗教神話（万葉集講座第二卷）によれば、万葉詩人は、古事記の伝承の異質物の抱合に因る雑揉性から解放せられてゐるといふ。武田祐吉博士の国土築造の神話に就いて（文学第三卷第七号）や西村真次博士の万葉集伝説歌謡の研究の中、第十章開闢伝説歌謡の項など。

〔三〕 益田勝美・岡田清子『出雲風土記成立の年代——『剝偽』論争の盲点について——』（日本歴史第四七号）。

〔四〕 藪田嘉一郎『出雲風土記剝偽』（日本歴史第二二号）。

〔五〕 益田勝美・岡田清子『出雲風土記成立の年代——『剝偽』論争の盲点について——』（日本歴史第四七号）。

〔六〕 武田祐吉『万葉集の成立』（万葉集大成・第一卷）。

〔七〕 津田左右吉『日本古典の研究』。

〔八〕 益田勝美『しのめの日本文学——始源時代文学史の構想——』（日本文学史研究十六、十七号）。

〔九〕 寺田寅彦『厄年とetc.（冬彦集）』。

〔一〇〕 古事記・序。

〔一一〕 益田勝美『しのめの日本文学——始源時代文学史の構想——』（日本文学史研究十七号）。

〔一二〕 島崎敏樹『感情の世界（岩波新書九七—二頁）の表現を借用したが、意識が、行動自体に対してでなく、行動の結果の或る部分に対してのみ成立することと共に、むしろ、精神生理学としての心理学では、今日、常識となつてゐるらしい。

〔一三〕 川崎庸之『天武天皇』（岩波新書九八—一三五頁）。

〔一四〕 武田祐吉『万葉集の成立』（万葉集大成・第一卷一〇〇頁）。

〔一五〕 万葉集十四—三四一七、三四四一、三四七〇、三四八一、三四九〇。

〔一六〕 武田祐吉『国文学研究万葉集篇二柿本人麻呂、及び、高木市之助』人麿（国語と国文学第二九卷第一〇号）。

〔一七〕 さもなければ、源氏物語の作者は、未詳といふ外なく、紫式部日記や蜻蛉日記は、偽作であるかも知れないことになる。

〔一八〕 古今集の仮名序から引用しておく。即ち、



もろもろのことをすてたまはぬあまりに、いにしへのこともわすれじ、ふりにしことをもおこしたまふとて、いまでも見そなはし、のちの世にもつたはれとて（中略）万えふしふにいらぬふるきうた、みづからのをもたてまつらしめたまひてなむ。

或いは、

人まろなくなりたれど、哥のこととゞまれるかな。たとひ、時うつり、事さり、たのしび、かなしび、ゆきかふとも、この哥の、もじあるをや。あをやぎのいとたえず、松のはのちりうせずして、まさきのかづら、ながくつたはり、とりのあと、ひさしくとゞまれらば、うたのさまをしり、ことの心をえたらむ人は、おほぞらの月をみるがごとくに、いにしへをあふぎて、今をこひざらめかも。

〔一九〕 拙稿『万葉集動辞考断章（芸林第三卷第二号）】。

〔二〇〕 三谷栄一『物語文学史論（第三章物語の崩壊、模倣の伝統の項）】。尙ほ、古代のかかる創作観は、前記「しのめのめ」の日本文学」によれば、益日勝美君も承認するやうである。

〔二一〕 右一首上見三柿本朝臣人麿之歌中二也。但以二句句相換二故載二於茲。——万葉集十一—二六三四、左註。

〔二二〕 沢瀉久孝『枕詞を通して見たる人麻呂の獨創性（万葉の作品と時代。六一頁）】。

〔二三〕 拙稿『国語史の時代区分（日本文学史研究十六号）】。

〔二四〕 例へば、額田王と題する作が、類聚歌材では、大御歌（一一七、八）であつたり、中皇命の詠が、天皇の御製歌である（一一九、一〇、一一、一二）といふふうに——。

〔二五〕 近藤奎『支那学芸大辞彙の引用による】。

〔二六〕 武田祐吉『万葉集全註釈（総説・二四四頁）】。

〔二七〕 沢瀉久孝『誤写誤読の問題を中心とした作品の時代的考察（万葉の作品と時代・二二頁）】。

〔二八〕 このことは、物語伝承の冒頭の敘述形式の変遷にも、はつきりと窺はれる。執筆を命ぜられた、新修竹取物語の教授資料に、稍と詳しく辿つておいた。

# 附記

卑見によれば、万葉集を素朴とする見解は、後世人の主観的な鑑賞を示すに止まり、事実といふよりは、要請としてのそれを構成したもの過ぎない。そろそろ、科学的な究明によつて、改訂せられてもよいのではなからうか。その意味で、万葉集大成に執筆せられた、吉沢義則博士の「万葉集の歌語」の立場は、同時に、稿者の立脚地ともなるものである。